幼少よりピアノを通じて音楽に触れ、音楽大学に学ぶという経歴は、アカデミックな分野におけるエリートをイメージするに十分かもしれないが（実際それも否めなくはない）、Babiにとっての音楽理論や技巧 / 技術は、観測結果を具体化するために用いられる探査機や各種ツール、もしくはその過程を生き抜くためのサヴァイヴァル・キットのように見える。別次元の事象や概念を記録するための言語体系のようでもある。フィールド・レコーディングの運用や、“植物学”とした前作の表題からも伺えるように、Babiの音楽には博物学的な視点が内包されているのではなかろうか。我が子のヴォイスをサンプリングするという行為にすらそれが感じられるというのは些か冷徹に思えるかもしれないが、博物学が持つ学術的な側面と、愛情やファンタジーは矛盾しない。南方熊楠しかり、ヴォイニッチ手稿のような偽書（？）しかり（Babiと渡邉竜也による2014年のエキシビション「uffufucucuの図形楽譜展」は、フェルドマンや武満のグラフィック・スコアよりもむしろヴォイニッチ手稿のグルーヴを想起させた）。好奇心ドリヴンの観察 / 観測に伴う現実と、そこから立ち上がる愛情や魔法じみた世界は、並行世界でもなく同時に存在しているのだ。

その強度や輪郭の明瞭さがこの10年で大いに増していることは、前作『Botanical』（2013, uffufucucu | noble）と比較せずとも、聴者には手に取るように伝わっているだろう。要因のひとつは音響のイマーシヴな立体感にあると思う。映像的に言えばフォトリアルな質感を音が伴うことで、ファンタジーの世界……例えばロココ時代のサロン・カルチャーやオリエント趨向の壮麗な美術様式（帝国主義をはじめ心して顧みなければならない史実を含むが、わたしたちにとっては主に視覚的に、ある種のファンタジックな領域でもある）……と現在 / 現実の境界を曖昧にしている。前作以上に目まぐるしく起伏に富んだ展開は、そのディティールやストーリーを強調すると同時に、現在 / 現実がダイレクトに反映されていることをも窺わせる。Babiにとっての現実とは、出産 / 育児の真只中にある現在の状況にほかならない。かつて思い描いた未来の何かを、不確定要素の塊を前に“ふきこぼす”（シングル『Ocean child carnival』より）経験は、育児の有無やジェンダーを問わず、誰しもが持っているのではないだろうか（と信じたい）。“未来の何か”が育児それ自体であったとしてもだ。ことに子を持つ女性は、“母性”という根拠のない社会的な概念に小突かれる傾向にある。Babiのようなクリエイティヴィティであればなおさら、“ふきこぼす”度合がブーストされるであろうことは想像に難くない。その上で、セクシャルなイメージ故に女性が愛でることはタブー視されてきた蘭を好んだというハノーヴァー朝第6代女王を引くあたり、このアルバムはフェミニズムの要素を多分に含んでいる。過去に想像した自身の姿との乖離が大きくなってゆくのを感じ、孤独感に苛まれ、涙をこぼし、身体のコントロールを奪われる日もあり、守るべき子供に実は守られているのだと気付く。そこにはマスキュリニティに抵抗するための力という以上のタフさ（と表裏一体の弱さ）がある。まるで、Babiが要所要所でイメージとして用いる虎のようだ（このアルバムのカヴァーにも登場するが、画家・山口洋佑のタッチと相まって、少し弱気な表情を湛えているように見える）。Babiに訪れた現実を聴者が突き付けられるとき、そのあまりの生々しさがファンタジーの解像度を上げる結果に繋がるという構造は、稀に見る驚異と言わざるを得ない。のみならず、このサヴァイヴァル・キットを携えての探索をつぶさに記録した私的（詩的）博物誌としての機能も有したマスターピースと言うべき全体像となっている。そのピースのひとつひとつに、豪華演奏陣やエンジニアの卓越した表現力が宿っていることも言わずもがなである。

ここまで長々と駄文を書き連ねてきたものの、実は故・坂本龍一が2012年の1stアルバム『6色の蠶とリズミカル』（uffufucucu | MY BEST! RECORDS）に際して寄せたコメントに本質は集約されている。同作から10余年、Babi自身や環境は大きく変容したものの、そのクリエイティヴにおける根幹は変えずにディフェンドしてきた証明ともなる一文だ。追悼の意も込めて、ここで改めて引用したい。「まるでオモチャ箱を開いたかのような音が聞くものの想像力を刺激し、そのサウンド・デザインの裏にはしっかりとした音楽理論と感性が織り交ぜられている。ドリーミーな印象を受ける楽曲群だが、実はおもちゃ箱の奥に潜む影と現実世界を表現したびっくり箱の様な作品！」

（文: 久保田千史）